

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4590300192		
法人名	株式会社山崎産業		
事業所名	大瀬別荘G.H.	ユニット名	愛宕
所在地	宮崎県延岡市古城町3丁目11-12		
自己評価作成日	令和5年10月18日	評価結果市町村受理日	令和5年12月21日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/45/index.php?action_kouhyou_pref_topiigyosyo_index=true
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人宮崎県社会福祉協議会
所在地	宮崎市原町2番22号宮崎県総合福祉センター本館3階
訪問調査日	令和5年11月21日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

本事業所は、今まで一度もコロナクラスターを出していない。これは職員の意識の高さと団結力、利用者や家族の協力の賜物であると同時に、日頃の感染症対策や学習の成果と思う。安全安心という集団生活で最も求められるポイントをクリアしていると思われる。グループホームは地域密着であるべきであり、地域への貢献と地域を活用する視点が求められる。コロナ禍の中、試行錯誤しながらこの課題に挑戦し、極力、運営推進会議を対面開催し、助言や指導を受けた。また、地域への貢献では近隣店舗に迷い込み熱中症で倒れた認知症と思われる高齢者の救助を頼まれ適切に対応した。ご近所からは野菜などを頂き、お返しにそれを調理したものを届けたりしている。花火大会は本荘から至近距離で行われる為、まじかで夏の一夜を堪能した。今後も質の高い住居環境と生活環境及びケアの両立を追及していきたい。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

寝たきりにさせない介護を目指し、歩行での移動ができるよう工夫し介助することで、利用者の生活の質の向上、生活機能の維持を支援している。災害対応については、ホームが岩盤のしっかりした高台に立地しており、利用者はもちろん地域住民の避難も想定し多めに食料や必要物品の備蓄をしている。9人乗りの車で各所に花を見に行ったり、近所への散歩をしたりと外出を支援している。毎月の行事は職員が立案計画し、利用者一人ひとりが楽しんで参加できるように工夫をして行っている。ホームでの生活や利用者の活動内容がよくわかる大瀬別荘便りを毎月発行している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	愛宕	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を毎朝復唱し、それに向けて日々施設一同皆で努力している。また、玄関はもとより、休憩室や面談室他に理念を掲示して理念に沿った実践ができるようにしている。	ホームの案内パンフレットに理念を記載している。毎朝5項目ある理念のうちの1項目を唱和している。名刺サイズの理念を携帯している。常に理念を共有し実践につなげている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	区に加入し、回覧板等を通して交流、地域の方々と笑顔で挨拶を心掛けている。隣接の美容院を利用したり、近隣の方から野菜などを頂いたり、またそれを調理してお返しをしたりしている。	市立図書館の事業所向け図書の貸し出しを活用し、利用者に読書の機会を提供している。水辺の公園づくり協議会に管理者が参加している。訪問理美容や近所の美容室を利用している。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナでの制限があり、なかなか難しいが、出来る範囲で行っている。近隣の飲食店に認知症の方が迷い込んでいると相談があり、すぐに駆け付けて適切な連携で救助した。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1度行われている運営推進会議においては利用者やその家族も参加して委員会の内容や日頃の活動の報告をしている。また、頂いた意見を実践に反映してサービス向上に向けて生かしている。	地区の防災の取り組みと一緒に参加して下さいとの意見があり、資料をいただき、感染症の流行が収束したら参加を予定している。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域における事業所の役割を常に生かせるように行政との報連相は心掛けて取り組んでいる。運営推進会議には行政からも出席を頂き貴重な意見から実践に繋げることも多い。	市の担当者の運営推進会議出席がありホームの状況を伝え、相談したり意見をもらうなど協力関係を構築している。近隣に泥棒が入る事件があり非常口の施錠について相談し施錠するようになった。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	何度も何度も研修を重ね、施設全体でケアの実践に取り組んでいる。日々の支援の中で発生した事案を検討し、拘束のない介護を実践している。	身体拘束適正化委員会があり、研修を重ね、職員の身体拘束に対する共通認識を図り、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。利用者に合わせてベッドからの転落防止や転倒防止などに工夫がみられる。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止のための研修を繰り返し、職員全員が意識の向上を図り防止の徹底を図ることに努めている。			

自己	外部	項目	自己評価	愛宕	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用されている利用者もいるが、制度についての学びはまだ出ていない			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所を考えている方はまず見学をしていただき、原則的には本人家族から同意を得た場合に契約をする。利用者とも直接話して頂き、生活の様子を知ってもらう。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	月一回のお便りや運営推進会議等のご意見を聞き、質問等あれば答えている。利用者や家族の意見・要望はしっかりと耳を傾け、運営に反映させるようにしている。	運営推進会議に毎回利用者と家族が出席して入居しての感想や意見を述べている。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	個別に管理者に話をすることもある。その際はしっかりと職員の話をきいてくれ、運営につなげられている。その他に職員研修、カンファレンスも行い、意見や提案を話す機会も設けられている。	意見や要望はカンファレンス時や必要に応じて管理者に伝えている。行事は職員が立案し実行している。急な勤務の代替もスムーズにできている。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	就業環境の整備はしっかり整っていて、各自向上心を持って働けるよう職場環境・条件とも整っている。資格取得時、研修費を負担し向上心を持って働ける職場づくりをしている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ前まで外部から講師を迎え勉強してきた。いろいろな研修参加の声かけもある。また、実践者研修をはじめ、職員が行きたいと思う研修には行けるようにして個々の向上に努めている			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会に加入し、研修への参加等行っている。コロナのため中断はあったが今再開されている。			

自己	外部	項目	自己評価	愛宕	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	より多くの情報アセスメント・基本情報・生活状況・疾患などの情報を得て日常生活に要望を取り入れている。様子や状態を観察しながら丁寧な声掛けを行い、本人の思いに耳を傾けるように努力している。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービスを導入する段階で、ケアマネが窓口となり、家族の意向も汲み取り、良い関係づくりに努めている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービスを導入する段階で本人や家族からの情報を基に必要な支援を把握すると同時に、実際の状態や意思に沿った支援を見極め要望に応えられるよう努めている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は利用者を家族の様に想い、家事活動や様々な場面において一緒に取り組み、自立支援に努め、お互いに協力し合える関係を築いている。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族との関りを大切に、可能であれば受診の対応等して頂いている。また、定期的な家族との面会や外出、本人の希望時にはいつでも電話をかけられるように家族との絆を大切に心掛けている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ感染状況を見ながら面会、外出を支援している。電話でいつでも連絡できるようにしている。	携帯電話やホームの電話を活用している。地元の馴染みの場所の地図や写真、夕刊の記事の地域の話題などを取り入れてレクリエーション活動を行っている。家族の迎いで自宅への外出ができています。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	運動やレクリエーション、生活動作等を通し、様々な関わりを行えるよう支援し、孤立しないよう努めている。その成果として、利用者間で思いやりを持って助け合う姿も多くみられている。			

自己	外部	項目	自己評価	愛宕	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	相談があれば支援していくよう努めている。 必要があれば退所後に入院した病院や利用施設と情報を共有している。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりとコミュニケーションを取り、思いを傾聴し、利用者本位の支援が出来るよう職員皆で情報を把握、共有できるよう努めている。		利用者一人ひとりの思いや意向の把握に努めている。利用者の細かな変化に注意し情報を共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族からの情報を基にこれまでの生活の仕方、馴染みの物を活用し、生活環境を整え、これからの生活が今までと大差なく安心してその人らしい生活が出来るよう支援に努めている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一日の様子について介護記録、申し送りなどで職員は利用者の日々の現状を把握し、共有している。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族、介護職員、医療機関等で意見を出し合い、現状に応じた介護計画を作成し実践して結果をモニタリングしている。		介護計画書は個人の記録ファイルに綴っており、日々の記録と連動できている。ユニットごとに毎月カンファレンスを行なっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	一人ひとりの一日の様子を個人記録に記録し、情報の共有を行っている。ケアの実践、見直しに活かしている。バイタルについては月毎にグラフ化し、実践に生かしている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人、家族の状況、要望に応じて、関係機関とも連携を図り、一人ひとりに合った柔軟なサービスの提供を心掛け、支援が行えるよう努めている。			

自己	外部	項目	自己評価	愛宕	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	気持ちの休まる場所へのドライブや散歩を実施している。地域包括支援センターとの連携で独居で熱中症危険度の高い方の支援を行ったり、成年後見人との連携などを行っている。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者がかかりつけ医を継続したいとの希望がある場合にはその希望に沿うようにしている。毎日のバイタル記録を持参し、日中の報告を行なうなど連携を図っている。	協力医への受診はケアマネージャーが同行受診している。それ以外は家族が対応し医療機関には情報提供を行っている。緊急時は職員が対応し、受診を支援している。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	普段と比べ、いつもと違う様子であれば訪問看護ステーションに伝え情報の共有を行っている。また、爪切りの依頼や分からないことなどの助言を貰っている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	日常の利用者の情報を共有し、病院側から質問があった場合には伝えている。また、入院中の様子を共有したり実際に病院に行きアセスメントも行っている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	利用開始時に看取りなどの指針を説明し、出来る事・できない事など生活支援の場としての事業所として各々対応できる関係機関、医療系施設との連携に努めることができている	重要事項説明書の中で医療行為に関する同意書、重度化した場合における対応に関わる指針に対する同意書、延命治療に対する指示書について説明し方針を共有している。状態の変化がある場合はその都度話し合っている。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルを見やすいところに掲示し、慌てていても確実に対応できるようにすると同時に、把握もしている。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	全体研修で迅速に対応できるように勉強会を行っている。研修だけでなく訓練も行っている。災害があらかじめ予想される大雨や台風災害では施設長などが泊って待機する体制としている。	夜間想定訓練を実施している。備品はインスタント食品以外にも乾物や米、調味料などを多めに備蓄し、七輪、炭、薪、バーベキューコンロなど必要物品を用意している。2階の会議室は利用者だけでなく地域住民の避難場所として利用できる。		

自己	外部	項目	自己評価	愛宕	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	例えば失禁によるケアの場合、目的だけでなくその行為が理解できるような補足的な説明を行い、話し方や言葉遣いにも注意して尊厳を傷つけないように対応している。		居室内に仕切りのカーテンが設置され居住空間のプライバシーが確保されている。家族の面会時は職員は同席しないようにしている。サービスを提供させていただいていることを基本としている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者が気兼ねなく意思表示できるような関係づくりに努めている。利用者が行きたいところなどは自由に希望を聞き、ドライブに繋がったりしている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的に、本人の心が向かないことを強制することはできないと思っている。本人のペースを尊重することで穏やかに過ごすことができています。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	洋服にしても、本人の好みの色やデザインは一人ひとり違う。朝「今日は何を着ますか？」という会話から本人の着替えが始まるケアが標準となっている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	多くの利用者は食事が楽しみだと言っている。その日の献立をホワイトボードに書いてもらい掲示している。テーブル拭きや食器洗い等の家事活動を一緒に行っている		行事食など季節感のある食事を提供している。利用者の希望を参考にした献立を提供している。調理師経験者の残存能力を維持するためにも調理し支援している。毎月1回粒あんのおはぎを提供している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの食事や水分の摂取量を把握し提供を行っている。咬合力や嚥下力も考慮し、食形態にも注意を払っている。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	週1回、歯科医、歯科衛生士が来荘し、検査、治療を行っている。毎食後、口腔ケアの際には状態に応じてケアに介入し自立の方でも口腔内の状態観察を行っている。			

自己	外部	項目	自己評価	愛宕	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンを確認して声かけ、誘導を行う事で、汚染やおむつ内での排泄を減らしている。本荘にて布パンツに改善した利用者も複数いる。		介護度5の利用者も介助歩行でトイレに誘導している。毎朝排泄状況をチェックし、排泄パターンに合わせて声掛け誘導を行い排泄を支援している。夜間はポータブルトイレを使用する利用者もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘は不穏の原因になり、何より本人が不快であることを理解したうえで、防止に努めている。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一人ひとりの体調や行動パターンに合わせて、入浴の声掛けを行っている。個室であるので、職員と楽しい会話ができる時間となっている。		原則週3回、午前午後の入浴支援を行っている。浴槽に入れない場合は背とアームから湯が出てくる座シャワーで対応している。入浴しない日は足浴や清拭で対応し清潔の保持に努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	休息したいと希望があれば休んでもらい、夜の眠りに影響がない様に声掛けを行っている			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人ファイルに綴じてある薬の情報を確認している。薬の変更があれば、利用者に変化がないか観察している。確実に飲み込んだか、口腔をのぞき込んで確認することもある。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりプランに沿った支援を行っている。特技や好きな事を聞いたり調べたりして支援している。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ドライブや散歩、外気浴など行い、外の空気を感ぜられるようにしている。コロナの職員への感染は続いているが、利用者への感染は今のところない。自由な外出にはまだ時間がかかると思われる。		いこいの広場や大橋への散歩、9人乗りの車で花の咲いている場所へのドライブなど外出の機会を支援している。家族の迎えで自宅への外出ができている。	

自己	外部	項目	自己評価	愛宕	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	コロナ感染症が終息するまでは、人混みに出かけての買い物支援は行っていない。金銭面に関する支援は預かり金から必要なものを職員が買ってくる支援をしている。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	深夜早朝でない限り、電話の要望には応じている。携帯電話の持ち込みも自由であるが、多くの利用者は使用方法を忘れるので、事務所の電話を使ってもらっている。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	毎月 季節に合った作品を作成し壁を飾り、刺激を受けてもらえるようにしている。要求に応じて太陽がまぶしいとの訴えにカーテンを引いたりしている。		共用空間は季節を感じさせる作品が飾られている。室内の照明が直接利用者に当たらないよう布でカバーをするなど居心地よく過ごせるよう配慮している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	その時の状況(精神面)に応じて声かけをし、席の配置換えを適宜行うようにしている。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族写真、本人の似顔絵や利用者が作成したちぎり絵などを居室に貼ったりして心地よい環境づくりを心掛けている。		利用者の好みの家具やテレビが配置されている。転倒予防のため移動式手すりつかまりポールと手すりを組み合わせて自力歩行を支援している。ベッドではなくマットレス利用者もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	移動式手すり等を多用し、自分で安全に起きること、歩くことを支援している。また、見守りカメラの設置により安全性を外からも確認できるようにしている。			